

新館長就任の挨拶

GREETING FROM THE NEW LIBRARY MANAGER

GREETING 1

図書館長
名古屋図書館長
のあいさつ



図書館長・名古屋図書館長
西野基継

大学図書館は、大学が行う高等教育及び学術研究活動を支える基盤である。そのために学術資料を収集・管理するとともに学生・教員に提供することを基本的任務としている。

愛知大学は、2012年に名古屋駅・笹島地区に五学部が集結する新キャンパスを開いた。財政的な制約の中で都心に立地する事業として、大学として備えるべき設備に関しては厳しい選択をせざるをえなかったようである。大学から用意されたスペースでは、五学部の所蔵する図書資料をすべて収容することはできず、学生の教育を最優先にして、研究用図書は三好移転の三学部については外部書庫に保管するとともに、その他の二学部については豊橋図書館にそのまま残すという体制（リクエスト・取り寄せの方式）をとることになった。しかし、これは不正常な状態である。日常の研究活動の拠点で、読みたい図書をすぐ読み、関連する図書にも触れることができないことは、とても辛いことである。しかし、何も変わることなく、5年が経過した。教員に実施した図書館アンケートでも、現状の改善を求める意見が多く寄せられた。図書館委員会は、大学図書館の本来の使命を果たすため、(第一に笹島地区での) 研究用図書配架スペースの増設の具体化の計画を策定して、常任理事会と協議する時期に来ているように思われる。

大学図書館を取り巻く環境の最も大きな変化は、学術情報の電子化である。図書本体の電子化（電子ジャーナル、機関リポジトリ）と図書へのアクセス

の電子化（OPACやCiNiiの検索システム）という二つの側面に分けられる。後者によって、文献検索の可能性は飛躍的に広げられ、ネットワークのさらなる進展が今後も期待されるだろう。前者に関しては、電子媒体資料の増大が、既存の紙媒体資料の利用にも影響を与えつつある。研究分野によっては、電子媒体資料中心でやってゆけるところがあるだろう。かといって、紙媒体資料が電子媒体資料に完全に取って代わられたわけではなく、紙媒体資料が依然として重要な学術情報であることに変わりないように思われる。両資料のバランスをいかにとりながら収集していくかは、今後の大事な課題である（上記の計画でも、考慮されるべき事項となる）。

愛知大学図書館は、創立70周年の伝統の下で、172万冊の蔵書をもつ一大図書館である。しかし、その収集は、校舎ごと、学部ごとに独自に行われてきた。さらに、学内には五研究所、三センター、六学会が存在し、それぞれ多くの蔵書を抱えている。大学全体の高所から、このようなカオスの状態を把握し、系統的・整合的な蔵書構成を目指すべきである。予算の削減傾向の中で、不必要な図書の重複を避け、効率的な図書収集に努める必要がある。将来的には、一元的な図書連合機構の創設が望まれるところである。ゆくゆくは、笹島の地に、これらの図書を集積した特色ある研究図書館（知のオアシス）が建設され、本学構成員だけでなく市民にも学術情報の発信が行われる日の来ることを願っている。

GREETING 2

豊橋図書館長
のあいさつ



豊橋図書館長
下野正俊

このたび豊橋図書館長を拝命しました、文学部の下野正俊です。ドイツ哲学を研究しています。

「(他の者たちは図書館と呼んでいるが) 宇宙は、真ん中に大きな換気口があり、きわめて低い手すりでも困まれた、不定数の、おそらく無限数の六角形の回廊から成り立っている…」

自身もプエノスアイレス国立図書館長をつとめた作家ボルヘスは、短編「パベルの図書館」をこのように書き始めます。そして、ボルヘスによるこの幾何学的宇宙＝図書館というイメージを背景に書かれたのが、イタリアの哲学者、作家エーコの記念碑的な『薔薇の名前』です。同書では、図書館があたかも迷宮であるかのような、魅力的な描写がなされています。図書館は、哲学的な作家を魅了するようです。

実際、哲学者たちの中にも、図書館長を務めた人物がいます。たとえば、ライプニッツはハノーバー王立図書館長を務め、蔵書の拡充に尽力しました。カントはケーニヒスベルク大学図書館長として、死蔵されていた膨大な土地台帳の整理というプロジェクトを指揮しました。どうやら、哲学と図書館とは相性がいいようです。私も図書館と幸福な関係を築くことができれば喜ばしいことと思います。

もちろん、本学の図書館はボルヘスやエーコが想像したような迷宮ではありません。むしろ、責任感ある職員の方々と歴代の館長、図書館委員会の努力

によって、現在までのところ秩序ある情報の宇宙であり続けました。しかし、それがこの先どの程度維持できるのか、楽観できるわけでもありません。

そもそも、大学という制度自体が大きく変貌しつつある現在、図書館もそうした変動と無縁ではありえません。たとえば、図書の電子データ化は否定できない趨勢です。これを軸に、今後図書館は大きく姿を変えていくことでしょう。しかし、現象がどのように変わっても、大学の本质が自由な研究と教育の場であるならば、その中心にあって図書館は大学の頭脳であり、同時に心臓です。

しかし、現実には、図書館は、そして大学自体も、外からも内からも脅威に晒されています。外からは、大学そのものの本质を空疎化する、経済合理性のみを至上とする新自由主義的改革、内からはそれに追随するニヒリズム。こうした脅威に直面して、図書館が収書の充実に向けた努力を放棄するとき、また、良好な閲覧環境とサービスを提供できなくなるとき、すなわち頭脳と心臓が停止するとき、それは大学自体が死ぬときでもあります。

将来のありうる様々な変遷を乗り越えて、それでも大学が大学であり続けようとするなら、私たちは、図書館を支え続けなければなりません。そうした見識と意志をもった利用者は、同時に図書館の守護者でもあります。

私も、そうした一人として力を尽くすことが出来れば、大学人として喜ばしいことと思います。